

【野菜】の【少雨、干ばつ】対策について

<通年>

農業経営支援課

【共通事項】

(1) 予想される被害状況

乾燥により生育遅延や草勢の低下、病害虫の多発が予想される。
施肥の効果が出にくくなる。

(2) 事前対策

井戸や畑かん施設等を整備しておく。

(3) 事後対策

井戸や畑かん施設が整備されている地域では必要最低限のかん水を行う。

○病害虫防除

- 1) 乾燥が続く場合は、普段は薬害のでない薬剤でも薬害が出やすくなるため、薬剤散布の前日には作物にかん水し、薬害を防止する。
- 2) アブラムシ、ダニ、うどんこ病の多発が予想されるため、発生初期から薬剤散布を徹底する。
- 3) 高温期（6月以降）に薬散する場合、前日に十分かん水して温度の下がる夕方に実施し、高温による薬害を防止する。
- 4) 高温期（6月以降）は特にアブラムシ、ハダニ、鱗翅目幼虫の被害が多くなるので、薬剤散布を徹底する。
- 5) 乾燥条件でうどんこ病の発生が多くなるので薬剤散布等の対策を実施する。

【施設野菜】

(1) 予想される被害状況

土壌が乾燥すると水分や肥料の吸収が悪くなり、生育遅延や病害が多発しやすくなる。

(2) 事前対策

○水が確保できる場所に施設を設置する

※夏秋期は水田に水を引くため、近くの用水路に水が流れているが、秋冬期は用水路に水が無いこともあるので十分確認する。また、水が流れていても水利権等の問題で河川や用水路等から勝手に水をくみ上げることができない場合もあるので、地域の水利組合等に十分確認をとること。

(3) 事後対策

基本的には、水源等は確保されているため、少雨・干ばつの影響は少ないと考えられるが、ピーマン、きゅうり、にがうり、オクラ等の作物は、かん水チューブを使い2t/10aを週に2～3回かん水する。（6月頃）

【雨よけ栽培】

(1) 予想される被害状況

収穫期：栄養成長はもちろん花芽の形成や開花交配、果実の肥大成熟と各生育ステージが混在する重要な時期である。土壌水分の確保とともに、ハウス内気温や地温の上昇抑制等の対策を行う。

(2) 事前対策

【施設野菜】(2) 事前対策を参照

(3) 事後対策

- ①高温強日射による植物体からの蒸散量が例年より多いと予想されるので、土壌水分や生育状況には細心の注意を払い、状況に合わせてかん水はこまめに行う。また、ハウス内は湿度の低下が激しく、しおれやすくなるため、通路等へ散水し湿度低下を防ぐ。
- ②ハウス内の温度上昇を防ぐため、日中の光線の強い時間帯に遮光率30～50パーセントの資材を用い遮光を行う。
- ③白黒ダブルマルチや、敷きわらを厚く敷くなどして、地温の抑制と土壌水分維持に努める。
- ④土壌水分不足や根の活力低下、地上部の生育スピードに根の発育が追いつかない等により、トマト、ピーマンの尻腐れ等の生理障害の発生が多くなるため、必要に応じて石灰や微量元素を含む葉面散布剤等を施用する。
- ⑤収穫後の品質低下を防ぐために、収穫は早朝の品温が上昇しない時間帯に行う。また、草勢の低下を防ぐために、果実は小さ目で収穫を行う。
- ⑥高温乾燥により、草勢が衰えるだけでなく、病害虫の発生が多くなるので防除の徹底に努める。

【露地野菜】

(1) 予想される被害状況

播種・植付前後：発芽（活着）不良が考えられる。

(2) 事前対策

水源を確保するため井戸や畑かん施設等を整備し、いつでもほ場にかん水できるようにスプリンクラーやレインガン等を設置しておく。

(3) 事後対策

植付前：かん水した後に畦立てするか、マルチングはかん水後速やかに行い、少量のかん水でも効果が出るように管理する。

植付後：土壌の乾き具合により週1回10～20mmのかん水を行う。粒や粉状の肥料は水に溶けないと効果が出ないので施肥後にかん水を行う。

*にんじんは急激なかん水により裂開する場合があるので、1回のかん水量（2～3mm）をおさえて、少量多回数かん水とする。



事後対策①スプリンクラーによるかん水



事後対策②大型スプリンクラーによるかん水

生育期：サトイモ、カンショ（丸いも対策）は畝間かん水、通路かん水を週50mm（6月頃）を目安に行う。

- ① 土壌乾燥防止のため、かん水を行うとともに、地温抑制のための白黒ダブルマルチや敷きワラを行う。かん水は日中に行うと、地温の上昇を助長するので日中のかん水は避け、早朝や夕方に行う。
- ② かん水として、畦間への湛水も有効であるが、この場合も夕方から早朝にかけて行い、気温上昇前には落水する。
- ③ 土壌水分不足や根の活力低下、地上部の生育スピードに根の発育が追いつかない等により、生理障害の発生が多くなるため、必要に応じて石灰や微量元素を含む葉面散布剤等を施用する。
- ④ 収穫後の品質低下を防ぐために、収穫は早朝の品温が上昇しない時間帯に行う。また、草勢の低下を防ぐために、果実は小さ目で収穫を行う。
- ⑤ 高温乾燥により、草勢が衰えるだけでなく、病害虫の発生が多くなるので防除の徹底に努める。

【かんしょ】

（1）予想される被害状況

植付前後：土壌が乾燥しているほ場が多く、立ち枯れ病が多発しやすくなる。

定植時期：晴天日の定植は欠株が発生しやすい。

生育～収穫期：日中しおれが激しく出る場合は、いも内部の褐変などの生理障害が発生しやすくなる。

（2）事前対策

【露地野菜】（2）事前対策を参照

（3）事後対策

定植前：かん水した後に畦立てするか、マルチングはかん水後速やかに行い、少量のかん水でも効果が出るように管理する。

定植時：取り置き苗を夕方定植したり、垂直植えにするなどして、マルチに植え付けた苗の先端がくっついて高温でやけないように注意する。挿苗直後の株元への少量のかん水は活着促進の効果があるので株あたり50cc程度行う。

定植後：土壌の乾き具合により週1回10～20t/10aのかん水を行う。粒や粉状の肥料は水に溶けないと効果が出ないので施肥後にかん水を行う。

生育期：丸いも対策として畝間かん水、通路かん水を週50t/10aを目安に行う。

生育～収穫期：生理障害防止のためかん水を行う。1度に多量にかん水するといもが裂開する場合があるので、2～5t/10a程度を目安に複数回行う。

【さといも】

(1) 予想される被害状況

生育期～収穫期：乾燥により根が枯死すると茎葉も枯死するため生育遅延がおこる他、水晶芋や芽つぶれなどの生理傷害も生じやすく、生育が回復した後も二次肥大による奇形が発生しやすくなる。

(2) 事前対策

【露地野菜】(2) 事前対策を参照

(3) 事後対策

生育期～収穫期：定期的にかん水を行う。10t/10a程度を目安に複数回行う。
(通路に流し込むぐらいのまとまった量が必要)

【にんじん・だいこん】

(1) 予想される被害状況

播種期：干ばつにより土壌水分が不足すると著しく発芽率が低下する。

(2) 事前対策

【露地野菜】(2) 事前対策を参照

(3) 事後対策

播種期：畑かん整備地域では30t/10a程度かん水後に耕耘播種を行う。